

社会学と経験

——制度化と科学的認識の基本問題——

〔註1〕

川崎賢一

I：本稿の目的

〈社会学の混迷〉がいわれてからすでに久しい。そういう状況にあって、方法論的にみて最も根底的問題として、制度化が科学的認識に及ぼしたものという問題を摘出し、さらに問題を整理することが本稿の目的である。そのために、次の二つの角度から摘出、整理してみたい。第一に、社会学的認識そして科学的認識そのものを経験という事態と関連させる視角と、第二に、社会学という学問を担う科学者集団のありよう——即ち、科学社会学——という視角から、整理してみたい。もちろん「歩き方を気にしはじめたばかりに歩けなくなったムカデ」(註2)という危険性を方法論自体はもっているが、現在の制度としての社会学の現状を省みて、問題の所在を明示化することには意味があるだろう。

II：経験と科学的認識・現象学的認識(1)

社会学とは、社会システムのワーキングのメカニズムを明らかにしようとする学問である。そのメカニズムを明示化する際に、第一に、社会現象を一般的に説明しようとするか、あるいは、歴史的に個性的に記述しようとするか——〈機能主義 vs. 歴史主義〉(註3)という軸——、第二に、事象について語るのか、あるいは、事象そのものを語るのか——〈科学的認識 vs. 現象学的認識〉という軸——、という二つの基本的観点があるように見うけられる。筆者は、第二の基本的観点について考えてみたい。社会現象は、確かに、一定のワーキングのメカニズムがある。しかし、社会システムの究極的構成要素としてのパーソナリティ・システムの意味付与作用——もちろんパーソナリティ・システムが一方向的に意味を付与するわけではない——が社会システムの運行には大きくかかわっている(例えば、A. Schutzの多元的現実(multiple realities)という概念がその例としてあげられる。)

第一に問題になるのは、近代科学と現象学の相関関係はどうなっているかという点である。そして、さらに、第二の基本的な問題は、ここでいうところの科学的認識の限界が——科学的認識それ自体が近代に入り制度化したという事実に伴い——〈制度としての科学〉のもつ限界なのであって、本来の科学的認識はそのような限界をもちあわせていないのではないかという問題である。

第一の問題は、科学的認識と現象学的認識の関係の問題といえるだろう。科学的認識というものは、〈現象 ↔ 事実の確定 ↔ 理論構築〉の間を往復するものであり、研究対象とは、原則として、独立した観察者により構成されるものであるが、結局、その対象について知る上でより対象を巧く把握できるかどうか——広い意味で役に立つかどうか(便宜性)——ということに

よりその存在が根拠づけられる。それに対して、現象学的認識は、現象それ自体を意識化している主体そのものの意識活動をそれ自体もう一度客体としてとらえかえそうという試みにはかならない。したがって、現象学的認識は、究極的には、学問的真理と生の実践とが重なり合う場所でもある。しかし、その認識は特定の状況の下にある社会システムやパーソナリティ・システムにとって便宜性をもたないこともあるし、邪魔になることすらある。そして、この両者の関係は、互いに機能として補い合うが、つまり、全体的認識にとって必要なものであるが、両方をプラスすると全体的認識が得られるわけではない（例えば、その両者はねじれの位置にある。つまり一つの平面上にはない、とでもいうべきだろうか）。

ところで、この両者の相異が、本来的な相異に基づくかどうか考えてみる価値があるだろう。つまり、現象学がフッサールによって諸学問の危機への反省として自己確立されたという事情はその相異に関連があるということである。結局、近代科学的認識への根本的批判として現象学が措定されたと考えられるのだろうが、そのことが近代科学的認識そのものの限界なのか否かという点が吟味すべき問題である。そして、この問題は先のパラグラフで提起した問題へと繋がるものである。

ところで、社会システムというのは、様々な個人より構成されるが、その個人が自己というものをもち、自分の生活を営み、自分一個のために生きようと考え、その結果、全部の個人がその他の全部の個人に対して他者であるようなシステムのことをいうだろう。(註4)このような社会システムのワーキングに関して、パーソナリティ・システムの側からとらえた第一の原理は、〈必要原理〉とでもいうべきものである。(註5)しかしながら、人間が根本的に社会的関係のネットワークの中でしか生きられないのも事実であろう。このことは、社会システムのワーキングに関して、もう一つ、〈交流あるいは交感原理〉というべきものが成立していることを意味しているだろう。(註6)その二つの原理によりワーキングするような〈他者よりなる社会システム〉が維持されるために、個人の諸行為を水路づけるような道德・規範・制度というものが要請される。つまり、社会システムの基本的要件であるそれらは、原理的に、当該社会システムの維持・存続のために働くことになる。ここに、パーソナリティ・システムからみて、制度が自存化し疎遠なものとして感じられ、逆に、自己実現を可能にする根拠が見い出されるのであろう。ところで、現実には、この二重の過程を含む制度化過程は、様々な社会的現実とのズレを生み出す。第一に、制度は原則であり、具体的現実とは距離があり、第二に、その運用にあたっては、時間的ズレや空間的ズレを本来的に持っているのである。ここで肝心なことは、社会システムの構成員が何らかの形で存続する限り、必ずそこには何らかの社会システムが存在し、また、それを支える制度というものも付随するという点である。

さて、近代化の進行に伴う随判現象に専門分化がある。近代科学も近代化に平行して、制度化——全体社会システムの一部門を機能的に担うものとしての部分的な社会システムとして組織化されること——されて、専門分化した近代社会に組み込まれていったことは明らかであろう。近代科学が制度化していった過程において、科学的認識が本来もっていたものを失い、歪曲化されていったと推測してみることは妥当な推論と考えられないだろうか。つまり、もしこの推論

が妥当なものであるとするならば、筆者の提出したい論点は、第一に、元々の科学的認識と近代科学あるいは制度化された科学的認識とは別もので、第二に、現象学が成立してくる根拠は、近代科学が制度化していった故に本来科学的認識がもっていた特性を喪失し、それを補うという点にあると考えられるだろう。ただ、ここでは、第一の論点を現代社会学の状況とからめてあとで検討することにして、科学的認識そのものについて立ち入ってみていくことにしよう。

科学的認識は受肉した人間が本来的に担っているような基本的認識であると考えられる。それは、経験に養われながら、ロゴスにつきうごかされながらの認識である。このロゴスには3つのはたらきがある。それは、第一に、集めるというはたらきであり、第二に、その集められたものを比量するというはたらきであり——比較というのはその極限形態であろう——、最後に、それらを秩序化するというはたらきである。(註7)ロゴスは経験からはたらきとして自律はしていても分離しているわけではない。〈経験に養われる〉とはそういう意味である。ところで、経験というのは〈感覚〉とか〈知覚〉とかいうものを土壌としている。現代心理学の知見によると、感覚は次のように分類される。(註8)

- (1) 特殊感覚：①視覚、②聴覚、③嗅覚、④味覚、⑤平衡感覚
- (2) 体性感覚：①触覚、②圧覚、③温覚、④冷覚、⑤痛覚、⑥運動感覚
- (3) 内臓感覚：①臓器感覚、②内臓痛覚

これに対して、知覚とは、感覚経験を含みながら、判断・思考・感情・記憶などにかかわる認知である。(註9) 筆者は認識が知覚に基づいていることを前提しているが、結局、ここでの筆者の主張点は次の2つである。第一に、近代科学的認識は、主に、視覚に引きつられる形でのものをみて対象化・抽象化するという側面が大きいのではないか。しかしながら、第二に、科学的認識は本来、他の感覚——特に、体性感覚——を認識の基礎にもっているのではないか、という2つの点である。(註10)ものを自己から離して知覚するのに有効なのは視覚によるやり方であり、例えば、体性感覚などは客体を自己から離して知覚するのに不向きであるようにみえるが、客体を対象として知覚するはたらき自体に相異があるわけではない。ただ、実際に万人に示され——端的に言えば、可視的であること——なければ意味がないとする近代科学的な証明法にとって視覚の占める位置は重要だった。結局、科学的知識体系が文字化されることにより認識が深化し広まるという延長線上に、実際に見えなければならないという思想が接合したのではなかろうか。もちろん、他に例えば、宗教的教儀体系も文字化されているのではないかという反論もありうるが、宗教の場合、文字化されること自体には意味がなく、それは信仰のための一手段あるいは媒介物にすぎず、文字自体が第一義的に重要なのではない。これに対して、科学的認識は真理を探究することを目的として、そのために論理——これ自体はシンボルの世界における自己完結性をその特徴としている——という基準を用いて、文字化することに意味がある。ここに、科学的認識そのもののなかに視覚の占める重要性の根拠があるのではなかろうか。そして、近年の近代科学的認識への批判の矢はこの点に収斂しているように筆者には思われる。ところが、よくよく考えてみると、この〈視覚による統合〉のほか、他の感覚による統合という可能性もある。この点について、〈わかる〉という事態を考えてみよう。〈わかる〉という事態は、一方で、論理演算

の結果として〈わかる〉という事態があるが、もう一方で、それが真であると納得する基底には〈わかる〉という知覚があるように思われる。その知覚は、〈わかる〉という感じとでもいうべきものであるが、この感じとは〈共通感覚〉(註11)のはたらきによるものであると考えられないだろうか。この共通感覚は、すべての感覚につながってはいるが、特に重要な位置にあるのは体性感覚である。つまり、この共通感覚があって初めて一方で規範とか制度という社会的なものをもう一方において、科学的知識体系を〈わかる〉のではなからうか。要するに、科学的認識は、視覚的統合にもとづく認識の仕方と、もう一方で、体性感覚に基づく認識の仕方があり、この体性感覚を中心にして共通感覚が形成され、この共通感覚により規範・制度・シンボル体系が身体レベルで認知されるのである。その際、科学的知識体系——特にそれを支える論理——は、ロゴス化作用がシンボル化され、かつ、体系化されたものだと考えられ、それ自体として、身体から離れて自己展開することが可能である。この点は、科学的認識を支える〈分析と総合〉という手だてについてもいえるだろう。つまり、分析するとは最終的に〈視る〉ということではないし、分析結果をまとめ、元の知識体系の中に位置づけるときも、〈視る〉という統合の仕方に還元されるというのは一つの統合の仕方であり、別の統合の仕方もあるということなのである(この分析と総合というのは、その他に、制度化された科学という点からも考えられなければならないが、この点はのちに検討する)。

Ⅲ：経験と科学的認識・現象学的認識(2)

それでは、一体〈経験〉とはどういう事態を意味し、〈経験〉とロゴスはどこにおいて出会うのだろうか？ われわれは長い歴史の中で、経験を様々に定義してきたが、(註12)筆者は、特に森有正という哲学者・思想家に耳を傾けてみたい。彼は、経験という事態を極めて簡潔に把握しているからだ。彼の著書はどれを読んでも経験に触れぬものはないといっても過言でないが、(註13)特に、大切と思われる部分を次に取り上げよう。

「経験は人間の数だけある。あるいは経験の数だけ人間がある。」(註14)

「〈経験〉というものがその一人の人間を定義するのである。」(註15)

「経験というものは、……ある根本的な発見があって、それに伴って、ものを見る目そのものが変化し、また見たものの意味が全く新しくなり、全体のペルスペクティブが明晰になってくることなのだと思う。……その場合大切なことが二つあって、一つは、この発見、あるいは視ることの深化更新が、あくまで内発的なものであって、自分というものを外から強制する性質のものではなく、むしろ逆にそこから自分というものが把握され、或いは定義されるということ、と同時に、それはあくまで自分でありながら、経験そのものは、自分を含めたものの本当の姿に一歩近づくとということ、更に換言すれば、言葉の深いいみで、客観的になることであると思う。」(註16)

「経験をもつということは、人間が人間であるための基本的条件であり、一つの経験は一人の人間だ、ということである。」(註17)

「本当の経験というものは、本質的には、直接的提示が出来ないものなのであって、それに於ける〈名〉を付けることが出来るだけである。」(註18)

「経験が体験と違うのは、そしてそれについての一つのもっとも根本的な点は、前者が絶対に人為的に、あるいは計画的に、作り出すことができない、ということである。……体験は心がけによって豊かになるであろう。しかし、経験は、……ただ変貌をとげるだけである。」(註18)

「私の生活の中にある出会いがあって、それが人であろうと、事件であろうと、その出会いが私の中に新しい生活の次元を開いて行く、そして生活のいみ自体が変化していく。それを私は、〈経験〉と呼ぶのであって、記憶の中にただ刻みつけられ、年月とともに消磨していくもの、あるいは、自分の生活の一部面の参考となるに止まって、そこに新しい次元を置くに到らないもの、それを私は〈体験〉と呼ぶのである。」(註19)

「〈経験〉というのは、ある一つの現実と直面いたしまして、その現実によって私どもがある変容を受ける、ある変化を受ける、ある作用を受ける、それに私どもは反応いたしまして、ある新しい行為に転ずる、そういう一番深い私どもとの現実との触れ合い、それを私は〈経験〉という名で呼ぶのです。」(註20)

結局、森有正にとって〈経験〉とはものとの出会いであり、発見であり、それは内的促しであり、一人の人間を定義するものであった。(註21) 意味というのは、このものともとの運動を通して生成してくる。しかし、意味が意味として定義されうるのは、人間においてしかない。その意味を根拠づけるのは意味体系を支える社会システムや文化システムであるが、ここで問題なのは、その意味を担うのが〈経験〉によって定義された人間なのだという点である。ところが、人間とは存在の根源的意味を問わずにはおれない存在者である。(註22) それは端的に言えば、人間は全て自分の意志により生まれてきたわけではないし、〈死〉という事態を避けることが不可能であるという二つ(厳密に言えば一つの)〈無意味化作用〉を引きおこす事態に基づくのである。(註23) 肝心なことは、人間にとってこの問いかけ—— 根源的意味を問うこと—— は、〈存在そのもの〉への問いが焦点になっているという点である。つまり、科学的認識によってもこの問題について語ることは可能だし、また、ある程度の便益性を持つといえる。例えば、無意味の感情を、(1)死による拒絶との遭遇による縦の無意味感あるいは形而上学的ニヒリズムと、(2)他者による拒絶との遭遇による横の無意味感あるいは生活感覚としてのニヒリズムに分け、〈近代化〉とからめて分析することは可能である。(註24) しかし、このように分析することは、無意味という事態について語りうるものであっても、その事態そのものを語りうるものではないだろう。

これは、結局、科学的思考が一種の道具的なものであり、何らかの具体的な形で役に立つ〈便宜性〉というはたらきをもつものに対して、現象学的思考が生の実践そのものに重なり合うという差異に基づいているからだといえるだろう。しかし、この相異は、直ちに—— 先に問題にしたが—— 第一に、近代科学的認識と本来の科学的認識、第二に、それらと現象学的認識との関係が問題になってくる。第一の問題は、科学的認識の成果が近代以降体系化、専門分化していき、制度化されていったことと、そもそもの経験に養われロゴスにつきうごかされた科学的認識との相異という問題である。これは、結局、前者が〈役割としての認識〉であり、後者が〈真理探究者としての認識〉であるという相異である。第二の問題は、現象学的認識と本来の科学的認識との相異の問題である。この相異は、現象学的認識が〈本質〉を明らかにしようとするのに対し、

科学的認識は〈事実〉を確定し諸事実間の運動法則を明らかにしようとするものの相異である。(註25)そこで、最後に問題になるのは、現象学的認識と経験という事態との関係である。現象学的認識は、意識現象そのものを明示化し、それをよりどころにして、自己・他者・世界を明らかにしようとする。しかし、その根底には、森有正のいうところの〈経験〉という事態が秘んでいるはずである。この〈経験〉という事態が一人の人間のなかで組織化あるいは体系化したものが〈思想〉である。要約すると、森有正のいう〈経験〉という事態のなかから〈本質学〉としての現象学と〈事実学〉としての科学が（そして後者の専門分化・制度化されたものが近代科学）形成されたのではないだろうか。

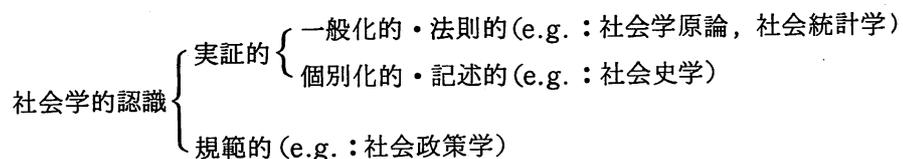
先に、科学的認識が制度化した近代科学へと転化していく過程で、全体的認識にとって機能的要請として、現象学的認識が生まれてこざるをえなかったといった。また、直前のパラグラフで、〈本質学〉としての現象学と〈事実学〉としての科学という論点を提出した。しからば、この両方の論点の関係はどうなっているかが次なる疑問だ。この問いに答えるためには〈自己〉という事態に注目する必要がある。科学的認識にしる現象学的認識にしる、結局は、〈経験〉にはぐくまれることは既にのべた。その〈経験〉により定義された〈自己〉ないし〈私〉という事態が、その両者の認識にはある。科学的認識は、常に、なんらかの対象を視てとり考える〈自己〉ないし〈私〉がいる。それを前提とすることなしに、対象を対象としてとらえることはできない。つまり、結論的にいえば、第一に、科学的思考の基礎であるデカルト的な、延長と思惟の二元論を出発点とする限り、〈自己〉ないし〈意識〉が客観化しえないこと。そして第二に、〈意識〉を〈公共の場〉に引きずり出すことは、そもそも論理的に不可能なのである。この二つの点は、結局、〈意識の私秘性〉と呼べるであろう。(註26)これに対して、〈意識の私秘性〉を解き明かすためには、その意識そのものをつかまえ、その意識作用からすべてを説明しようとしなければならぬはずである。それが現象学的認識にほかならない。言い方を変えるならば、現象学的認識とはロゴスによる徹底した実証主義化にほかならないだろう。意識から出発することにより、自己・他者・世界が開示していき、そして、その認識は生の実践とも重なり合うであろう。

このように、科学的認識と現象学的認識とは、〈自己〉というものを分水嶺にして左右に広がっており、機能的に相補的ではあるが、極めて異質な認識の仕方である。科学的認識は〈自己〉を前提として、そこから遠心的と遠くへいこうとする。つまり、〈自己〉を前提としているから、対象を客体としてとらえられ、その客体間の運動のパターンを認識しようとする。つまり、客体あるいは客体間の運動のパターンを認識しようとするものである。これに対して、現象学的認識は、〈自己〉そのものを問うて求心的に内へむかっていく。自己を自己たらしめる意識作用自体を徹底して、その意識そのものによってつかまえようとする。つまり、生の実践にかかわる運動である。(ただ、〈本質的〉ということは、〈経験〉により定義された自己にかかわるということである。)

以上で、科学的認識と現象学的認識の射程を明らかにしてきたので、次に制度化した社会学の射程を明らかにする作業にとりかかろう。

IV：制度としての社会学の問題

まず、三つのデータを提示しよう。表1は日本社会学会に所属する会員数の推移に関するものであり、表2は社会学会々員を対象に行なわれた調査結果による、今後の社会学の進み方を左右する基本的発想に関するものであり、表3は同様に学会員の最重要研究課題に関するものである。表1から読みとれることは、会員数が増大し続けているという事実である。大部分の大学に社会学の講座がもうけられ、幾つかの大学には社会学部が増設され、また、社会（特に、行政体や企業）の方からの社会調査の需要も増大しているように見うけられる。以上から推測して、社会学が制度化されてきているといってもよいのではなかろうか。その中で、特に、筆者が注目しているのは、実証的な社会学と機能主義的社会学である。これは筆者の仮説でしかないが、社会学者の増大は、社会システムの要請であり、その大部分は機能主義的社会学と社会調査技術をセットにしたものが求められていると推測され、その1つの参考資料として、表2では、今後の基本的発想として機能主義的社会学をあげる比率が最も高いし、さらに、表3では、最重要研究課題として、家族・都市・地域といった従来の実証的な社会学——社会学理論の応用問題といえるだろう——が多くあげられている。以上のことから、筆者は、社会学が制度化されてきており、その対象として機能主義社会学・実証的社会学・社会調査があげられ、以下の行論ではこの3つが具体的イメージとしてあることをことわっておきたい。この点について、若干のコメントを付け加えたい。ディシプリンとしての社会学において社会的認識は通常次のように区分される。(註30)



この整理から、社会学的認識が他の諸科学と原理的に共通しており、異なるのは、研究対象の違いという点を学ぶべきだろう。つまり、従来のようにあまりに自然科学と社会科学の区別を強調すべきではないだろう。ただし、この整理からもれている視角で大切な点は、認識のスタイルあるいは基本的発想の差異という点であろう。(註31) (ただし、この点については、今回は触れずに先にすすみたい。)

科学的認識の仕方に関する古典的方法は、分析と総合という方法である。まず、研究者が全体的文脈の中で問題を設定し、それに応じて研究対象を限定し、分析のための軸を設定し、それに合わせて対象を切開してみ、その結果を全体的文脈に照し合わせて問題の解決になっているかを判定するという科学的活動のプロセスをとる。ところが、この分析と総合という方法には、科学的知識体系がアウトプットとして分析と総合による知識の蓄積と発展に関するものと、それぞれの科学者における分析と総合の実践に関するものという2つの分節化が考えられるだろう。筆者のいいたいことは次のことだ。科学的な知の探究は、人間のもつ知的欲求の充足をめざすものであるが、その際、個々の研究者において何らかの仕方で分析と総合という手続きのメカニズムが作動していると考えられる。ところが科学者の活動が役割として固定化していくに従って、その知的活動の機能不全——つまり、分析と総合への無意味感——がでてくる。その機能不全

| 年 | 人 数 | 年 | 人 数 |
|------|------|------|------|
| 1939 | 530 | 1975 | 1415 |
| 1968 | 1179 | 1976 | 1520 |
| 1970 | 1283 | 1977 | 1560 |
| 1973 | 1240 | 1978 | 1743 |
| 1974 | 1300 | 1979 | 1748 |

<表 1 : 社会学会の会員数の推移>(註27)

| 基 本 的 発 想 | 人 数 | % |
|---------------------|-----|-----|
| 現象学・エスノメソドロジーなど | 27 | 9 |
| マルクス主義あるいは史的唯物論 | 54 | 18 |
| 批判的社会学・ラディカル社会学など | 27 | 9 |
| 交 換 理 論 | 14 | 5 |
| 機能主義社会学 | 75 | 25 |
| シンボリック・インターアクションイズム | 12 | 4 |
| 数理社会学 | 21 | 7 |
| そ の 他 | 23 | 8 |
| N.A. D.K. | 49 | 16 |
| 計 | 302 | 101 |

<表 2 : 今後の社会学の進み方を左右する「基本的な発想」(新睦人氏作成資料)>(註28)

| 分 野 | 人 数 | % | 分 野 | 人 数 | % |
|--------------|-----|-------|--------------|-----|------|
| 社会哲学・社会思想 | 9 | 2.98 | 経 済 | 0 | 0 |
| 社会学史 | 9 | 2.98 | 法 律 | 1 | 0.33 |
| 一般理論 | 23 | 7.62 | 社会史 | 2 | 0.66 |
| 社会変動論 | 8 | 2.65 | 余暇・スポーツ | 4 | 1.32 |
| 社会集団・組織論 | 8 | 2.65 | 民族・民俗 | 7 | 2.32 |
| 階級・階層・社会移動 | 6 | 1.99 | 文化・宗教 | 15 | 4.97 |
| 家 族 | 30 | 9.93 | 社会心理・社会意識 | 17 | 5.63 |
| 農村・漁村・地域社会 | 41 | 13.58 | コミュニケーション・情報 | 11 | 3.64 |
| 都 市 | 12 | 6.29 | 社会病理・社会問題 | 17 | 5.63 |
| 国際関係・エリマスタディ | 1 | 0.33 | 医療・社会福祉 | 14 | 4.64 |
| 政 治 | 6 | 1.99 | 計画・開発 | 0 | 0 |
| 社会運動・運動論 | 3 | 0.99 | 調査・測定論 | 2 | 0.66 |
| 経営・産業・労働 | 20 | 6.62 | そ の 他 | 8 | 2.65 |
| 人 口 | 2 | 0.66 | D.K. N.A. | 7 | 2.32 |
| 教 育 | 19 | 6.29 | 計 | 302 | 100 |

<表 3 : 研究課題として最重点をおいている専攻分野 (新睦人氏作成資料)>(註29)

は、1つは〈科学の情報危機〉と呼ばれることがらに関連する。(註32) 科学的情報の増大に伴い、第一に、個人研究者の情報処理能力を超えて、彼の中で自らの知的活動が知識体系全体の中のどこに位置するのかが見えにくくなり、その結果、無意味感が喚起され、第二に、巨大な量の情報からなる科学的知識体系をどう組織化するという問題が提起される。もう一つの機能不全は、科学の専門分化は、結局、制度としての科学が社会システム中に位置づけられ、特にそのシステム要件充足にとって重要な貢献を与えるようになったという点にある。そこにおいては、制度としての科学は自律的展開をとげる。システムにとって要件充足を果すか否かにより、科学者集団や組織・科学的知識は分化する(つまり、科学的知識体系自体の自律的な展開と社会システムの要件充足とが一致するとは限らないという基本的矛盾が生じてくる)。実は、実証的態度は、官僚制の中で文書主義の占める位置が大きいように、制度としての科学にとって極めて適合的態度様式なのである。社会学が、〈社会科学の呼びだまり〉といわれるような状態から次第に脱却し、ディシプリンを持った学問として一定の形式を備えるということは、制度の中に組み込まれるという事態が当然含まれる。そこにおいては、当然、分析と総合という古典的方法の機能不全——その1つは〈情報危機〉の問題、もう1つは、制度としての問題——が問題化されるであろう。筆者は、今回はこの問題を提出するにとどめ、この検討は次の課題としたい。

V : 問題の整理

ものともとの運動あるいは出会いが経験という事態であり、この根本的事態に基づいて一人の人間が定義されるのであった。その際、受肉した身体は、経験に養われながら、ロゴスに出会う。ロゴスは人間の認識が根本的にもちあわせている、集め・比量し・秩序化するというはたらきをもつ。そして、そのロゴス化作用の結晶として意識という事態がある。これは、人間においては自己意識を自明の出発点とする。その際に、その自己意識を主観(=観察者)として前提し遠心的な方向に認識するのが科学的認識であり、その自己意識自体をその当の意識自体が徹底して問いかえし明らかにする、つまり、求心的な方向に認識しようとするのが現象学認識であった。科学的認識は、便益性、つまり、客体全体の可能性、あるいは、制約性を明らかにしようとするのに対し、現象学的認識は、究極的に、実存的生(=死すべき存在としての人間)の実践に重なり合う。要するに、このような射程をそれぞれの認識がもっているのであるが、現在のパラダイムとしての機能主義社会学と実証的社会学を考察対象として、科学的認識の古典的方法である分析と総合という手だてが機能不能に陥る可能性を指摘し、その問題として、1つは情報危機の問題を、もう1つは、制度としての科学という問題を指し示した。

以上が、これまでの考察の要約であるが、ここで、これから論ずべき問題を今までの議論をふまえて整理しておこう。

本稿で筆者が論じたことは、多岐にわたる論点を含んでいる。その中で、最も大切な論点は、〈制度化が認識に及ぼすもの〉という論点である。具体的に言うと、筆者の考察したものからは、二つの推論の連鎖が考えられるのである(key wordは、本来的科学の認識・近代科学的認識・現象学的認識の三つであった)。第一に、本来的科学の認識と近代科学的認識は別な認識の仕方

であり、そのいみで、現象学的認識と対置されるのは近代科学的認識であるという考え方である。もう一つは、近代科学的認識は、本来的科学的認識の特殊な形態であり、そのいみで、現象学的認識と対置されるのは本来的科学的認識であるという考え方である。筆者の現在の見通しでは、前者の方が妥当であるという考え方をとるが、厳密に考えていけば、本来的科学的認識が制度化されていく過程で変質していったのが近代科学的認識であり、全体的認識のために要請されてくるのが現象学的認識であるというように考えられるのではないだろうか。いずれにしろ、このテーマ——〈制度化が認識に及ぼすもの〉——は、第一に、認識論・思想史・科学哲学といった認識のレベルにおいて、第二に、科学史、科学社会学という事実のレベルにおいて、議論されなければならない。そして、そのテーマを腑分けして詳細にみていくことが筆者の次の課題である。

〔註〕

〔註1〕本論文は、見田ゼミ（1978年3月）で発表した「科学社会学に関する覚え書(I)」と、修士論文の第1章とを基礎にしてまとめられた。本論文作成にあたり、東京大学大学院の正村俊之氏と稲増龍夫氏から貴重なコメントをいただいた。記して謝意を表したい。〔註2〕富永健一，1963，p.120 〔註3〕富永健一，1963：直井優，1973 〔註4〕，〔註5〕森有正，1976，p.p.186-187 〔註6〕中村雄二郎，1977，p.p.180-195 〔註7〕中村雄二郎，1975，p.33 〔註8〕学阪良二（ed.），1969，p.p.6-7 〔註9〕大山正（ed.），1970，p.1 〔註10〕中村雄二郎，1979，p.135，p.189 〔註11〕中村雄二郎，1979 〔註12〕経験をめぐる論議は、プラトンやアリストテレスの時代以来連続とおこなわれてきた。〔註13〕辻邦生，1976 a 〔註14〕森有正，1978 a，p.p.283-284 〔註15〕，〔註16〕，〔註17〕森有正，1978 b，p.p.50-52，p.78 〔註18〕森有正，1978 c，p.23 〔註19〕森有正，1979 b，p.p.315-316 〔註20〕森有正，1976，p.173 〔註21〕辻邦生，1971 〔註22〕渡辺二郎，1975，p.57 〔註23〕渡辺二郎，1975，p.66 〔註24〕作田啓一，1976，p.p.256-257 〔註25〕Husserl E.，1950，（訳）第一巻・第一篇・第一章 p.p.59-98 〔註26〕村上陽一郎，1976，p.p.209-211 〔註27〕このデータは、筆者の作成したものである。最初の3つは住所録から算出し、あとの7年間は収支決算に伴う報告に関する学会ニュースによった。全体として、社会学会会員が増加しているとみてさしつかえないだろう。〔註28〕，〔註29〕このデータは、第48回日本社会学会大会（1975）で、新睦人氏が「機能分析への批判と反批判について」を発表した際に配布された資料に含まれているものである。調査方法は、学会名簿が母集団で、郵送による全数調査である。〔註30〕富永健一，1975，p.p.25-29 〔註31〕筆者は、修士論文（p.p.7-9）において、次のような分類をしておいた。参考までにあげておきたい。(1)構造=機能主義社会学，(2)マルクス主義社会学〔①マルクス主義社会学，②存立構造論〕，(3)意味学派的 sociology 〔①交換理論，②エスノメソドロジー，③ラディカル社会学あるいは批判的 sociology，④自己反省の sociologyあるいは社会学の sociology，⑤シンボリック・インターアクションイズム，⑥現象学的 sociology，⑦実存主義的 sociology，⑧identityの sociology，⑨labeling理論，⑩言語派 sociology〕 〔註32〕Turchin V. F.，1977，（訳）2巻，p.p.180-186

文 献

- Brain R., 『The Nature of Experience』, 1959; 山鳥重(訳), 『経験の本性』, 1980, みすず書房
- Descartes R., 『Passions de l'ame』, 1649; 野田又夫(訳), 『情念論』, 1978, 中央公論社
- Heidegger M., 『Die Zeit des Weltbildes』, 1950; 桑木務(訳), 『世界像の時代』, 1962, 理想社
- Husserl E., 『IDEEEN』, 1950; 渡辺二郎(訳), 『イデーシオン I-1』, 1979, みすず書房
- 荻阪良二(編), 『講座心理学 3 感覚』, 1969, 東大出版会
- James W., 『Essays in Radical Empiricism』, 1912; 榎田・加藤(訳), 『根本的経験論』, 1978, 白水社
- 川崎賢一, 「社会学的主意主義理論研究序説」(修士論文), 1978
- 木村敏・中川久定, 「自我とはなにか?」, 現代思想 vol 7-16, 1979
- 岸田秀, 「幻想としての文化」, 創造の世界 No.29, 1979
- Merleau-Ponty M., 『Phénoménologie de la Perception』, 1945; 竹内・小木(訳), 『知覚の現象学』(2巻), 1967, みすず書房
- Merton R.K., 『Social Theory and Social Structure』, 1957; 森ほか(訳), 『社会理論と社会構造』, 1961, みすず書房
- 森有正, 『思索と経験をめぐって』, 1976, 講談社
- “ , 『森有正全集 2』, 1978 a, 筑摩書房
- “ , 『 “ 3』, 1978 b, “
- “ , 『 “ 4』, 1978 c, “
- “ , 『 “ 5』, 1979 a, “
- “ , 『 “ 12』, 1979 b, “
- “ , 「日本思想入門」, 思想 No 665, 1979 c
- 中山伸樹, 「<<科学の社会学>>の基層」, 社会学研究, 1979, 37号
- 直井優, 「構造一機能分析の展開」, 思想 587号, 1973
- 村上陽一郎, 『近代科学と聖俗革命』, 1976, 新曜社
- “ , 『科学・哲学・信仰』, 1977, 第三文明社
- “ , 『新しい科学論』, 1979, 講談社
- 中村雄二郎, 『哲学の現在』, 1977, 岩波書店
- “ , 『知の変貌』, 1978, 弘文堂
- “ , 『感性の覚醒』, 1975, 岩波書店
- “ , 『共通感覚論』, 1979, 岩波書店
- “ , 「ノンセンスとコモン・センス」, 思想 No 667, 1980
- “ , 「現代の哲学を問う — 共通感覚とトポス —」, 創造の世界 No.34, 1980
- 大山正(編), 『講座心理学 4 知覚』, 1970, 東大出版会
- 作田啓一, 「近代化とニヒリズム」, 岩波講座文学11巻に所収, 1976
- “ , 「自己と外界」, 創造の世界 No.25, 1978

- Sartre J.P., 「La Transcendence de l'ego」, 1937 ; 竹内芳郎(訳), 「自我の超越」, サルトル全集23巻に所収, 1957, 人文書院
- Sartre J.P., 「Esquisse D'une Théorie des Émotions」, 1939 ; 竹内芳郎(訳), 「情緒論粗描」, 全集23に所収, 1957, 人文書院
- 富永健一, 「社会学理論と〈モデル〉の役割」, 思想 No.467, 1963
- “ ”, 「社会科学の統合化」; 田中美知太郎(編), 『講座哲学大系5』に所収, 1964, 人文書院
- 富永健一・塩原勉(編), 『社会学セミナー1 社会学原論』, 1975, 有斐閣
- Turchin V.F., 『The Phenomenon of Science』 1977 ; 鎮目・林(訳), 『人間の現象としての科学』(2巻), 1979, 岩波書店
- 辻邦生, 「感覚のめざすもの」, 思想563, 1971
- “ ”, 「ある生涯の軌跡」, 思想630, 1976 a
- “ ”, 『霧の廃墟から』, 1976 b, 新潮社
- “ ”, 「触題」, 森有正『経験と思想』に所収, 1977, 岩波書店
- “ ”, 「情緒論の試み」, 思想635・636・637・638・639・641・643・644・646・647, 1977
- 78
- 山本泰, 「〈共存存在〉様式としてのコミュニケーション」, 思想635, 1977
- 鷺田清一, 「行為の基礎にあるもの」, 思想652, 1978
- 渡辺二郎, 『ニヒリズム』, 1975, 東大出版会

(かわさき けんいち)